

大学新共通テスト「記述式」のこれだけの問題点

国語より深刻な数学、どちらも共通テストでの実施は撤回を

吉田弘幸 予備校講師

2020年度から実施される大学入試新共通テストの目玉とされた^{2019年11月13日}のは「英語民間試験の活用」と「国語と数学への記述問題導入」だった。前者の延期を発表した11月1日の記者会見で、後者について萩生田文部科学大臣は予定通り実施することを明言した。しかし、その後「記述問題導入」への批判を取り上げた報道が少しずつ広がっている。その批判は、特に国語に集中しているが、数学でも同様の問題点を抱え、むしろ深刻な点もある。数学固有の問題も含めて共通テストへの記述問題導入の問題点を論じ、解決には導入を撤回するしかないことを訴えたい。

大学入試共通テストの概要とスケジュール

まず、議論の前提として制度の概要を説明する。

新共通テストは現行センター試験の**後継の共通テスト**として計画されている。共通テストは1月に実施され、それを受けた受験生は自己採点の結果に基づいて2次試験を受ける大学を決定する。

受験生は例年50万人を超える。試験の実施から国公立の2次試験までは約1ヶ月あるが、各大学への出願期間は試験実施の約10日後からの10日間に設定されている。

大学入試センターは、共通テストの成績を受験生の出願先の大学に直接送付する。当然、記述問題の成績も同様の扱いとなるので、記述問題の採点も2週間程度で完了する必要がある。

以上の理解を前提に共通テストへの記述問題導入の問題点を論じていく。



今年1月のセンター試験。予備校関係者らを前に試験会場に向かう受験生たち＝2019年1月19日午前、長野県松本市の信州大

50万もの記述式解答を短時間で採点できるのか

記述問題は、受験生の手書きの答案を人が肉眼で読み、採点基準に従って採点することになる。そこで、まず物理的に採点が可能なのかが問題となる。採点者は1万人とも2万人とも言われているが、50万超の答案を短時間に正確に採点することは極めて困難である。

正解例や採点基準は事前に策定されるが、必ず出題者の想定しない解答も現れる。その場合には、新たに正解例を追加したり、採点基準を調整したりする必要があり、その決定を全採点者に周知しなければいけない。また、その時点で既に採点を終えた答案の再点検も必要になる。そのような作業を50万超の答案と1万単位の採点者に対して行うことはほとんど不可能だろう。

また、公平・公正な採点を行う前提として、すべての答案と採点者を同じスペースに収容する必要があるが、そのような場所を確保できるのだろうか。データを通信で送り、採点者は自宅PCを使うとの可能性も指摘されているが、それは模試や通信添削で採用される手法である。情報管理の厳格性が要求される大学入試では、そのような方法は言語道断である。

大学の教員でない者が採点するという致命的欠陥

次に、採点者の質も重大な問題である。学生アルバイトが採点する可能性も指摘され、そのことが問題視されているが、実は学生とかアルバイトという属性は本質ではない。大学入試の採点を大学の教員でない者が行うことが致命的な欠陥である。

大学入試の素人が行う採点に公正性を期待することは難しい。受験生の答案の適否を正確に判断するためには、出題された問題の作成者と同等の知見が要求される。1万人を超える採点者の全員にそれは期待できないし、また、採点者ごとのバラツキも大きくなるだろう。つまり、採点の公平性も期待できない。大学入試としては致命的な欠陥である。

共通テストの役割を考えれば記述式は不要

記述問題の採点とは、どういうものだろうか。記述問題の正解には幅がある。その幅の境界の判断は採点者に委ねられる。その際、ある程度の主観的な判断が不可避である。2次試験の採点では、各大学の採点者間で事前に十分な意思疎通が図られているので、その幅の境界にブレは小さい。また、必要があれば1枚の答案をすべての採点者が目を通して点数の判断が下される。

しかし、共通テストで実施される記述問題の採点においては、そのような意思

疎通も統一した判断も期待できない。



2018年11月10日に実施された大学入試共通テストの試行調査。試験開始を待つところ = 東京都目黒区、諫山卓弥撮影

結局、「思考力・判断力・表現力」を評価する目的で共通テストに記述問題を導入する価値はあるのか、という根本問題に行き着く。その答えは否である。大学ごとの2次試験では、多くの場合、記述問題や論述問題が出題される。大学は、その大学での勉学に必要な「思考力・判断力・表現力」をそこで測ることができる。

共通テストの目的は、高等学校での履修内容が十分に習得できているのかを判定することにある。基礎的な知識や技能を試すことが、共通テストの果たすべき役割である。その役割は現行のセンター試験のようなマーク式の問題で十分に果たせる。「応用力」や「思考力・判断力・表現力」を測定することは大学ごとの2次試験の役割である。

数学の記述式問題の意味とは

数学において記述（と言うよりは論述）問題を出題する意味は、結論に至る思考過程を評価することにある。問題の条件を正しく把握できているか、そこから正しい論理で議論を展開できているか、そして、問の要求に適切に応答しているか、その過程に重要な意味がある。だから結論が合っても、途中の議論に致命的な間違いがあれば0点と評価されることもある。逆に、結論に誤りがあっても、そこまでの議論が精密に行われていればほぼ満点が与えられることもある。

ところが共通テストの記述問題は、最後の結論のみを「手書き」で「記述」するだけだ。記述問題として出題する意味はまったく存在しない。平成30年度の試行調査の数学の記述問題はすべて、工夫すればマーク式で出題可能である。

数学に関しては、もう一つ深刻な問題

すでに実施された試行調査の問題では、解答の条件を厳しく設定して、国語でさえも正解が一意に定まるように工夫している。しかし、それでは記述問題として出題する意味が失せてしまう。

結局、「思考力・判断力・表現力」を評価する目的で共通テストに記述問題を導入する価値はあるのか、という根本問題に行き着く。その答えは否である。大学ごとの2次試験では、多くの場合、記述問題や論述問題が出題される。大学

がある。国語と違って、記述部分の点数も総点に算入されるのである。国語はマーク式部分の得点とは別に段階評価が示され、大学の判断により合否判定の資料から除外することができる。ところが、数学では合計した総点しか示されないのだから、そのような措置が行えない。また、受験生が点数開示を行っても記述の採点が正当に行われたのかを確認することができない

今年の大学入試センター試験第一日の問題と正解（一部）。マークシート方式なので、正解は一つだ。



最も重大な問題は民間企業への委託

最後に最も重大な問題を指摘する。それは、採点を民間企業が請け負うことだ。

まず、問題漏洩の可能性がある。短期間に完了するために事前に問題や正解例・採点基準を採点者に知らされることが予想される。1万単位の人間に事前に知らせることは問題漏洩の温床となりかねない。

また、採点により収集された莫大な受験生のデータの管理も難しくなる。すなわち、情報漏洩の危険も高い。通信添削の業者が受講生の情報を漏洩する事件も現実に発生している。さらに、民間企業が採点業務を担うことにより、収集した情報の目的外利用、つまり、問題集などの作成に利用する利益相反的な行為が起りうるという懸念も大きい。

もう一つ指摘すべきは、文部科学省の制御が利かないことの危険性である。英語民間試験の活用が破綻した大きな理由の一つは、試験実施団体を文部科学省がコントロールできなかったことにある。記述問題導入も、同じ轍を踏み、大きな混乱を生じる可能性がある。

英語民間試験の活用については、多くの専門家からの問題点の指摘があったにもかかわらず強行しようとしてギリギリのタイミングでの延期となった。記述問題導入には上述のように多岐にわたる問題点がある。専門家の指摘に耳を傾け一刻も早く正しい判断を下して欲しいと思う。

掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

Copyright © The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.